

異世界でカフェを開店しました。
9

目次

異世界でカフェを開店しました。	9
ある精霊の一日	233
あるメイドの憧憬 <small>しょうけい</small>	255

異世界でカフェを開店しました。
9

プロローグ

ドアをノックする音が部屋に響く。
使い込まれた飴色の執務机に向かっていた男性が視線を上げた。

「入れ」

彼が声をかけると、開いたドアから入ってきたのは一人の青年だった。

「失礼します」

「おお、君か」

青年を見るなり、男性は表情を緩める。

「出発のご挨拶に参りました、総帥閣下」

「今回の件は騎士団とは関係ないことなから、その呼び方はやめたまえ」
苦笑まじりに男性が言うと、青年は困ったような顔をした。

「つい、いつもの癖で……」

「まあ、場所が場所だけに仕方ないか。……で、これから行くのか？」

男性が話を本題に戻すと、青年は表情をキリリと引き締める。

「はい、彼女を迎えに行つて参ります」

「そうか、あいつの驚く顔が目には浮かぶな」

いたずらを企んでいるかのように、男性がにやりとすると、青年もつられて小さく笑う。

「驚いた顔をしっかりと見えますよ。では、そろそろ失礼します」

「ああ、気を付けて行ってこい」

「はっ！」

青年は肘を突き出すようにして右手を左胸に当てる。

それを見て、男性は再び苦笑した。

「だから敬礼は不要だ」

「あ……」

身に染みついた動作をしてしまった青年は、気まずそうに腕を下ろす。

「……失礼します」

なんとも締まらない空気の中、彼は退室していった。

ドアが閉まる音を聞き届けた男性は、椅子の背もたれに寄りかかる。

「さて、我が娘——ヴィルナはどんな反応をするかな？」

遠い空の下にいる愛娘の驚く顔を思い浮かべて、にんまりと笑うのだった。

第一章 なぜか羨望の的になっております。

カランと軽やかなベルの音を立てて開かれたドアから、暖かい空気が店内に入り込む。季節は夏の盛りを迎えていた。

「いらっしやいませ！」

夏の空気とともに入店してきた二人組の女性客に、すかさず声がかかる。声の主は、入り口近くにあるショーケースのところで作業をしていた、黒髪の女性店員だった。

ここはカフェ・おむすび。

フェリフォミア王国の王都にある道具街、その古い町並みの中に紛れるようにして、ひっそりと佇む小さなお店だ。

落ち着いた色合いながらも人目を引く赤いドア。

格子のついた窓からは、お客さんで賑わう店内の様子が見える。

壁に埋め込む形で設置されているガラスのショーケースには、色とりどりのケーキや、今の時季にはびつたりなゼリーなどが並び、通りかかる人の目を楽しませていた。

「二名様ですね。こちらのテーブルへどうぞ」

女性店員は、二人をテーブル席に案内する。そして椅子に座った彼女たちに、メニューを広げて差し出した。

「今日の日替わりメニューは、冷製スープランチと冷製パスタランチの二種類です。お飲み物もセットになっておりますので、こちらの中からお選びください」

メニューを指して説明する店員を、女性客たちは何か言いたそうにうずうずしながら見上げた。なんだろうと思った店員が説明を中断すると、女性客の一人が意を決したように口を開く。

「あの！ ご結婚おめでとうございます！」

「おめでとございます〜！」

と、もう一人も続けて言った。

「あ、ありがとうございます……」

祝福の言葉をかけられた女性店員は、照れくさそうにはにかむ。

カフェ・おむすびの店長であり経営者でもある彼女——リサ・クロカワ・クロードは、少し前に華々しく結婚式を挙げたばかりだった。

「シシルメリーのお店に飾られてたドレスも素敵でした！」

「本当に〜！ 私もあんなドレスを着て結婚した〜い！」

賑やかに話し始める二人。リサはその様子を微笑ましく思いながら、「ご注文が決まった頃にまた参りますね」と言ってその場を離れた。

カウンターへ向かうと、そこにはミルクティー色の長い髪をサイドテールにした女性店員がいた。「これで何度目かしら？」

くすくすと笑いながら言った彼女は、接客担当のオリヴィア・シャーレインだ。どうやらリサと女性客たちの会話が聞こえていたらしい。

「嬉しいけど、ちょっと恥ずかしいんだよね……それにしても、シリルメリーのドレス効果はすごいなあ」

リサが感心しつつ咄くと、横から別の声が聞こえてくる。

「当たり前ですよ。私も今朝シリルメリーの前を通りかかりましたけど、改めて見てもすごく素敵なおドレスですもの、女の子なら憧れないわけがないですよ」

そう言ったのはデリア・オーウェン。彼女も接客を担当している女性店員だ。

肩口までの焦げ茶色の髪をハーフアップにして、バレッタで留めている。リサよりもいくつか年上で、オリヴィアと同じく幼い子供を持つママさんであった。

今話題になっているドレスとは、リサが結婚式で着たウェディングドレスのことだ。

現在はシリルメリーという人気服飾店のウィンドウに飾られているため、誰でも見る可能性がある。

そのシリルメリーは、リサの養母であるアナスタシアがオーナー兼デザイナーをしているお店で、ドレスもアナスタシアがリサのためにと一から作り上げたものであった。

リサはデリアの言葉に頷く。

「確かにフルオーダーメイドだし、シアさんが張り切って仕上げた力作だからね」

ドレスを作るアナスタシアの姿を思い浮かべながら答えると、デリアが首を横に振る。

「それもそうだけど、それだけじゃないでしょう」

「そうよ！ シリルメリーの服自体そう簡単には手が出ないのに、花嫁衣装となるとさらにでしょう？ だからますます憧れるのよ」

オリヴィアもデリアに同意する。おっとりとした口調だが、その言葉には妙に熱がこもっていた。いまいちピンとこないのは、リサがこの世界の出身ではないからかもしれない。

女性ならば一度は着てみたい憧れのブランドと言われるシリルメリー。しかしリサにとっては養母がオーナーであり、この世界に来た時から身近な存在だったのだ。

デリアが「そういえば」と続ける。

「さっき来た別のお客さんが言っていましたよ。リサさんとジークくんが式のあとに馬車で王都を回っているのを見たって」

「もしかしたら、それも憧れる一因になっているのかもしれないわね。一生に一度のことだもの。女の子ならああいう華やかな式を夢見るものよね」

「な、なるほど……」

式を挙げた本人であるリサは、そこまで意識していなかった。

だがリサの式に出席した上に、自らも結婚式を挙げたことのあるオリヴィアとデリアが言うのだ。未婚女性ならば、なおさら期待に胸を膨らませてもおかしくないと、リサは思った。

「注文お願ひしまーす」

お客さんの呼ぶ声により、話はそこで途切れる。

「はい、たぐいませう」

注文を聞きに行ったオリヴィアを見送ると、リサはデリアに声をかけた。

「私は厨房に入るの、こっちはお願ひします」

「はい」

デリアの返事を聞いたリサは、カウンターの奥へと進む。

そこは厨房の入り口だった。

涼しいホールから厨房へ入ると、コンロやオーブンから発せられる、もわつとした熱が襲ってくる。

くる。

その中で作業をしている男性店員が二人いた。

一人は果物の果肉がごろごろ入った器に、ゼリーの素となる液体を注いでいる。

「お疲れさま、ジーク」

リサが声をかけたその男性は、ジーク・ブラウン——いや、ジーク・ブラウン・クロード。

カフェ・おむすびの副店長で、リサの旦那様でもある。

銀色の髪をわずかに揺らして顔を上げた彼は、青い目でリサを見る。そしてすぐに視線を戻し、作業を続けながら聞いた。

「ああ、ホールは大丈夫なのか？」

「うん、今はだいぶ落ち着いてるからね」

お昼を過ぎ、もうそろそろランチタイムも終わる時間帯だ。リサがホールにいたのは、お客さんの退店が重なり、会計と片付けのための人手が必要になったからだだった。

もう少しすると、今度はカフェタイムが始まる。今ジークが作っているゼリーも、それを見越した補充分だ。

順調そうなジークの方はいいとして……と、リサはもう一人の男性店員に視線を向ける。一見、料理人には見えない大柄で筋肉質な青年が、大きな鍋からスープを器によそっていた。

彼はヘクター・アディントン。

元々はフェリフォミア王宮で働く料理人見習いのだが、二年間という期間限定でカフェに勤めてくれている。

カフェに来た当初は、王宮の厨房とのシステムの違いや、多岐にわたる仕事内容に戸惑っていたようだ。

「スープランチ二つ、上がりました」

だが料理の載ったトレイを両手に持ち、ホールの方へ声をかけている様子を見る限り、カフェの

仕事ぶりがすっかり板についている。

この調子でいろんな知識を吸収して、王宮に戻ってほしいとリサは思っていた。

第二章 恋とは落ちるものようです。

カフェタイムも落ち着いた夕方。カフェ・おむすびに、ある客がやってきた。

「こんにちは」

ドアを開けるとともに顔を覗かせたのは、一人の女性。

近くにいたオリヴィアが、にこやかに声をかける。

「あらヴィルナさん、いらつしやいませ」

やってきたのは、ヴィルナ・エイゼンシュテイン。

フェリフォミアの騎士団に所属している、ジークの元同僚だ。

以前は地方にいたが、数か月前に王都へ異動してきた。学院時代からの友人であるジークを訪ねてきて以来、カフェ・おむすびにたびたび顔を出すようになった。

今ではすっかり常連の一人である。

「まあ、今日はいつもと雰囲気違いますね」

オリヴィアがヴィルナの格好を見て言った。

背が高く、すらつとしているヴィルナは、どちらかというトボーイッシュな服装が多い。だが、今日の彼女は、とても可愛らしい装いをしていた。

紫の長い髪を編み込み、左サイドに緩く流した髪型。

袖や裾にさりげなく刺繍が施された、白いワンピース。

薄く軽そうな生地のカサがふわりと揺れ、編み上げサンダルを履いた白く細い脚がちらりと見えた。

「今日は学院時代の友人と会ってただけで、服を見に行った時に無理やり押し付けられて……」

ヴィルナは恥ずかしそうに頬を染め、肩を竦めてみせる。

「とても似合っていますよ。ヴィルナさんはすらつとしているから、なんでも着こなせて羨まし

いわ」

「いやいや、そんなこと……」

オリヴィアに褒められたヴィルナは、恐縮しながら手を振った。

そこで、大事なことを思い出す。

「……つと。そういえば、今日ってリサさんかジークいますか？ 実は二人に話があつて……」

「ああ、あの話ですね。今呼んでくるので、座って待っていてください」

ヴィルナの言葉に思い当たる節があつたオリヴィアは、カウンター席を勧める。そして、リサとジークを呼ぶために厨房へ向かった。

ややあって、リサを連れて戻ってくる。

「ヴィルナさん、わざわざ来てもらっちゃってごめんなさい」

「いいのいいの、ちょうど通りかかったとこだし」

リサが申し訳なく思いながら言うと、ヴィルナは笑った。

「それでね、あっちへ行く時のことなだけど……」

さっそくとばかりに、ヴィルナが話を切り出す。

「実家に連絡したら、迎えの馬車を手配してくれるっていうからさ、リサさんとジークも同乗してもらった方が楽なんじゃないかな〜と思って！」

「え、でも邪魔にならない？ 大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。むしろ、私が二人の邪魔になっちゃうかもしれないけど」

ははは、とヴィルナは明るく笑う。

今話しているのは、来月の頭に予定されているリサとジークの新婚旅行のことだ。行き先がヴィルナの故郷ニーゲンシュトックであるため、少し前からリサたちはいろいろと相談に乗ってもらっていた。ちょうど同じ頃、ヴィルナも帰省するそうなので、観光案内を頼んである。

ヴィルナが帰省のことで実家に連絡したところ、そちらの方で馬車を用意して、迎えに来てくれることになったという。せっかくなので、リサとジークもその馬車に乗っていかないか、というお誘いだった。

「ありがとう。でも、一応ジークにも聞いてみるね！ 馬車はジークの実家の伝手で手配するつもりだったから」

「そうだね、もう予約してたらまずいし」

すでに手配を済ませているのであれば、キャンセルする必要がある。

リサはヴィルナに少し待ってくれるように言うと、ジークのいる厨房キッチンへ向かった。

「ジーク、今ちよつといい？」

リサは、出来上がったケーキをトレーに並べているジークに声をかけた。

「これをショーケースに出してからでもいいか？ 確かチーズケーキが品切れになってたはずだから」

ヴィルナがわざわざ来てくれているとはいえ、リサたちのプライベートのことよりもカフェの方が大事だ。

リサがもちろん、と頷うなずきかけた時、横からヘクターの声がした。

「ジークさん、俺が出してきますよ」

今は手が空いているらしく、ジークの代わりにケーキの補充をしてくれるという。

「じゃあ、頼む」

「はい！」

ジークは残りのケーキを素早くトレーに載せると、それをヘクターに渡した。

慎重な足取りでトレーを運んでいくヘクター。その後ろ姿を見送ると、リサは先ほどの話の続きをする。

「今ヴィルナさんがお店に来てるんだけど、ヴィルナさんのおうちが帰省のための馬車を手配してくれたんだって。それで、よかつたら一緒に乗って行かないかって誘ってくれたんだけど、どうする？ 馬車の手配って、ジークの方でも済ませちゃった？」

「いや、馬車はまだ探してるところだったから、正直助かる。何しろ国をまたいでの長距離移動となると、引き受けてくれる業者がなかなかなくてな。去年みんなで行ったスーザノウルは隣国だし、観光地だから手配も楽だったんだが……。ヴィルナがいいのであれば世話になるう」

「わかった。じゃあ、ヴィルナさんに返事しておくね」
ジークの答えを聞いたリサは、ヴィルナのいるホールへと引き返す。

気が急いでいたので、周りをよく見ずに厨房を出てしまった。

「うわっぶー！」

顔から何かにぶつかり、変な声が出た。

リサの身長よりはるかに大きなもの。

よく見ると、それはこちらに背を向けて立っているヘクターだった。

ぶつかったにもかかわらず微動だにしないヘクターを訝しみ、リサは声をかける。

「ヘクターくん？」

けれど、これにも彼は反応しなかった。

リサはヘクターの体の横をどうにかすり抜け、正面に移動する。そして彼の表情を見て、思わずぎよっとした。

わずかに頬を染め、ぼーっと一点を見つめるヘクター。

その視線をたどると、そこにはヴィルナの姿があった。

——も、もしかして……

リサはヘクターとヴィルナの姿を交互に見る。

ヘクターのこの視線は、どう考えても気のある相手に向けるものだった。

——え、え、えー！！ まさかヘクターくんがヴィルナさんに恋!?

リサは目をまん丸にして、心の中で叫んだ。

その時、デリアと話をしていたヴィルナが、リサの姿に気付いて手を上げる。

「あ、リサさん」

それにリサが手を上げて応えようと、隣にいるヘクターもにへつと笑いながら手を上げた。

リサはいいとして、ヘクターまで上げるとは思っていなかったのだろう。ヴィルナは不思議そうに首を傾げていた。

リサはぼーっとした顔で手を上げているヘクターを、どうにかしようと呼びかける。

「ヘクターくん、ヘクターくん!!」

名前を呼んで肩を叩くと、ようやくヘクターが緩慢な動作でリサの方を見た。

「ヘクターくん、ケーキの補充は終わったの?」

「……あ、はあ……っは、はい! 終わりました!」

リサの言葉でやっと現実に戻ったのか、ヘクターは手に持ったままのトレーに視線を遣り、慌てて答えた。

「大丈夫?」

何がとは言わないが、リサはそう問いかける。

「は、はい!! 厨房に戻ります!!」

ヘクターは駆け込むように厨房へと入っていった。

その姿を苦笑しながら見送ったリサは、ヴィルナのところに戻る。

「お待たせ、ヴィルナさん」

ヘクターから熱視線を送られていたことに気付いていないヴィルナは、お茶の入ったグラスを置くと、無邪気にリサを見上げた。

「いえいえ。で、ジークはなんて?」

「馬車の手配が難航してるから、よかつたら同乗させてほしいって」

「うんうん、了解! ニーゲンシュトゥックからフェリフォミアに来るのは割と簡単なんだけど、逆

は結構難しいんだよね。それを見越してうちの家族も迎えを寄越すみたいだし」

「そうなんだ〜」

以前、ヴィルナがなかなか帰省できないと言っていたのには、こういった理由もあったようだ。

「じゃあ、私は実家に連絡しておくわ」

「ありがとうございます」

リサの言葉に笑顔を返すと、ヴィルナはすぐに席を立つ。軽く手を上げて出ていく彼女を見送ったりリサは、厨房へと引き返した。

そして、またもやぎよつとする。

「へ、ヘクターくん!? びっくりした……」

厨房の入り口に、ヘクターがでんと突っ立っていたのだ。

今度はぶつかることはなかったが、リサは驚いて体をびくりと揺らした。一気に心拍数の上がった胸を手で押さえていると、ヘクターがずいっと顔を近づけてくる。

「リサさん! 今話してた人って誰ですか!? 知り合いですか!」

どうやら厨房に戻ったあとも、気になってホールの様子を窺っていたらしい。リサがヴィルナと仲よく話していたのもしっかり見ていたようだ。

「あゝ、ヴィルナさんのこと?」

「……ヴィルナ、さん」



ヘクターは頬を染めて呟いた。ヴィルナの名前を知ることができて嬉しかったのか、なんとも締まらない表情を浮かべている。

「というか、ヘクターくんもヴィルナさんとは会ったことあるはずだけど……」
「え!? ど、どこですか!？」

「どこでって……ヴィルナさんは私の結婚パーティーにも来てくれたし、カフェの常連の一人だし……あ、そっか! いつもは騎士団の制服を着てるから、印象が違うのかも」

「騎士団……あ、あの人か!!」

記憶を探っていたヘクターは、リサの言葉でようやく思い出したらしい。

「なんで気付かなかったんだ、俺!! あんな可憐な人が近くにいたのに!!」

過去の自分を責めるように叫び、頭を抱えた。

一方、リサはヘクターの言葉に目を丸くする。

——か、可憐!? ヴィルナさんが!？」

友人としてそこそこ付き合いのあるリサから見ても、ヴィルナに可憐という印象はない。

確かに、今日のヴィルナの格好は素敵だと思っただし、目を奪われても仕方がないと思う。でも、彼女の性格を知っているリサは、凛々しいとかサバサバとかそういう言葉の方が先にくるのだ。

まるつきり違う印象を持っているらしいヘクターに困惑してしまう。

「ヘクターくん、あのさ……」

リサは肝心なことを伝えようと、恐る恐る口を開く。

盛り上がっているところ申し訳ないが、ヴィルナには婚約者がいるのだ。

もちろんヘクターのことは応援してあげたいけれど、今回は相手が悪かった。どう頑張っても、

彼の恋が実ることはない。

ならば、傷が浅くて済む今のうちに言っておいた方がいいと思った。

しかし――

「ヴィルナさん、今度はいつ来るだろう……街中でばったり会ったりしないかな……」

ヘクターはぼわんとした顔で一人呟いている。自分の世界に入ってしまった、リサの言葉は全く届いていないようだ。

「おーい！ ヘクターくん」

試しに顔の前で手をひらひらさせてみるも、効果はない。

ヘクターの急激な気持ちの高ぶりように、リサはやれやれとため息を吐くのだった。

第三章 そわそわしているようです。

翌日もヘクターの浮かれっぷりは変わらず……いや、さらにひどくなっていた。

開店前の準備も鼻歌まじりに行っている。

リサは『恋は盲目』という言葉を書き出し、しみじみと実感した。

恋するのはとても素敵なことだ。ただ、ヘクターのわかりやすさと変わりように、リサは少し戸惑っている。

それに、ヴィルナの婚約者のことも伝えそびれてしまったため、リサの胸中は複雑だった。

そんなリサのもとへ、怪訝な表情を浮かべたジークがやってきた。

「……あれは大丈夫なのか？」

「うーん、どうだろう……」

ジークには昨日家に帰る途中、ヘクターがヴィルナに一目惚れしたらしいことを話した。

その時、ヴィルナに婚約者がいることを教えるべきかと相談したが、ジークからは『ヘクターが直接本人から聞いて玉碎すればいい』となんとドライな反応が返ってきたのだ。

まあ、確かにこれはヘクターの問題なので、外野がしゃしゃり出るべきではないのかもしれない。そもそも、ヘクターからヴィルナを好きになったと聞かされたわけでもないのに、勝手に決めつけるのもどうかと思う。

それに、もしかしたらヘクターの熱は一時的なもので、すぐに冷める可能性も無きにしも非ず。だからリサは、しばらく様子を見守ることにした。

――のだが、一夜明けてもヘクターがちつとも変わっていないところを見ると、本当にそれでい

いのかという気持ちになってくる。

と、そこでヘクターがぐるりとリサたちの方を振り返った。

目をらんらんと輝かせ、ずんずん近づいてくる。

「リサさん、ヴィルナさんの好きな食べ物って知ってますか!？」

「え、ヴィルナさんの好きな食べ物？ えっと、確かモンブランをよく注文してた気がするけど……」

「モンブラン!! 可愛い……」

ヘクターは口元を綻ばせ、うっとりとした。

しかし、すぐにその表情が曇る。

「材料のブプロンの季節は、まだ先ですね……」

がっくりと肩を落としてしまったヘクターに、リサは「ああ」と気付いた。おそらくヴィルナの好物を作って、アピールしようと考えたのだろう。

だが、モンブランの材料であるブプロンという木の実は、秋にならないと手に入らない。ヘクターはヴィルナの好物を作るという手が使えなくなったことに落胆したようだ。

ちなみにジークはと言えば、我関せずというようにリサたちのそばから離れ、一人マイペースに開店準備を進めていた。

落ち込んでしまったヘクターが可哀想になったリサは、そっとフォローする。

「一番好きなのはモンブランかもしれないけど、甘いお菓子は割となんでも好きみたいだよ、ヴィルナさん」

その言葉を聞いて、ヘクターはガバツと顔を上げた。目を大きく見開き、リサとの距離を詰めてくる。

「本当ですか!？」

「う、うん……」

リサが内心で「近い!!」と叫んだその時、リサとヘクターの顔の間に、銀色のトレーが差し込まれた。

ゴチンという音とともに、ヘクターのおでこにトレーがぶつかる。

「あだっ!!」

おでこを押さえたヘクターと、リサがトレーの持ち主を見ると、そこには冷ややかな目をしたジークが立っていた。

「ヘクター、私情を挟むのもそのくらいにしとけ」

普段から無表情でとっつきにくいジークだが、今はそれに拍車がかかっている。笑みなど欠片も浮かんでおらず、それどころか冷たい怒気を感じさせるジークの様子に、ヘクターは顔を強張らせ、「ひいっ」と引き攣った声を上げた。

「ははは、はい!! 仕事に戻ります!!」

浮かれモードから一転、焦って作業に戻ったヘクターを、リサは啞然としながら見つめる。

ジークが、やれやれというようにため息を吐いた。

「リサもだぞ。ヘクターに構うのもほどほどにしろよ」

さっきの冷たい口調とは違い、気遣うような口調で言われて、リサはようやく気付く。どうやらかなり近い距離まで迫ったヘクターを遠ざけてくれたようだ。

嫉妬も少し入っていたのか、ジークはリサの返事を聞かずに作業に戻っていく。

そんなジークの気持ちが嬉しくて、リサは笑みを浮かべると、自身も開店準備に励むのだった。

カフェ・おむすび本店で働いているメンバーは、ヘクター以外みんな既婚者である。

恋愛経験があり、それなりに人生経験も積んでいる年上のメンバーたちが、わかりやすすぎるヘクターの行動に気付かないはずがなかった。

接客担当であるオリヴィアとデリアの二人も、すぐさまヘクターの異変に気付いた。

それもそのはず、いつもなら厨房にいてホールにはめったに出てこない彼が、今日に限って頻繁に顔を出すのだ。

そわそわと落ち着きなくホールを見回しては、がっくりと肩を落として厨房に引っ込み、時間を置いてまたやってくる。

これは何かあるなど、接客担当の二人は思った。

オリヴィアが、ホールに出てきたリサを呼び止める。

「ねえねえリサさん、ヘクターくんが、ちょこちょこ顔を出すんだけど……」

「あー、たまにいなくなると思ってたら、こっちに来てたのね……」

リサは苦笑を浮かべた。

訳を知っていいそうな様子のリサに、オリヴィアは好奇心のこもった眼差しを向ける。

「そわそわしながら誰かを探しているように見えたけど、もしかして好きな人でも待ってるのかしら？」

オリヴィアはカマをかけるように尋ねた。

リサは「あー……」と困った顔で頬をかく。

「やっぱりバレバレだよね……。昨日、ヴィルナさんが来たでしょう？ ヘクターくんってば、彼女に一目惚れしたみたいなの」

「えっ！ 相手はヴィルナさんなの!？」

オリヴィアは驚きと興味の入り交じった声を上げた。その声が店内に響いてしまい、ハッと口元を押さえる。

少し離れたところにいたデリアが、さささつと近づいてきた。

「ヘクターくん、ヴィルナさんに恋しちゃったの?」

デリアは面白がるような顔で聞いてくる。オリヴィアと同様に、ヘクターの行動を気にしていた

ようだ。

興味津々な二人を見て、女性は何歳になっても恋バナが好きだなと、リサは苦笑を浮かべる。そして、いきさつをかいつまんで話した。

「ヴィルナさん、昨日は騎士団の制服じゃなくて、私服だったでしょう？ しかもきれいなワンピース姿で……どうやら、それにやられちゃったらしいんだよね〜」

オリヴィアとデリアの二人は、そろって「ああ」と頷いた。

「いつもと違った雰囲気だったものね、ヴィルナさん」

デリアの言葉に、オリヴィアも同意する。

「そうねえ、騎士団の制服も凛々しくて素敵だけど、昨日は可愛らしい雰囲気でこれまた素敵だったわ」

そこでデリアが首を傾げた。

「でも、初対面ってわけではないでしょう？ ヴィルナさんはリサさんたちの結婚式にも出席してたし、カフェにもたまに来てくださるし」

「そうなんだよね。だけど、いつもは騎士団の制服だから気付かなかったみたい。結婚式の時も正装用の制服だったし。カフェでは私服の時もあったと思うけど、ヴィルナさんって基本的にシンプルな服を好むから……」

リサはヴィルナの服装を思い浮かべながら呟いた。

デリアがニヤニヤとした笑みを浮かべて言う。

「じゃあ存在は認識していたけど、突然印象の違う服で登場したヴィルナさんに、コロツとやられちゃったわけだ」

「そうみたい。ヘクターくん、もうすっかり舞い上がってるらしくて……昨日からずっと挙動不審だよ。まあ、今のところ問題は起きてないけど」

リサは困った顔で肩を竦めた。

今は問題は起きていないが、これからどうなるかはわからない。そう暗に示したりサに、オリヴィアとデリアは苦笑する。

「あらあら……なるべくこつちでも様子を見るようにするわね」

オリヴィアはリサを気遣うように言った。

恋愛は自由だし、それ自体はともいいことだ。だが、カフェはヘクターにとつて職場である。恋愛にばかり現を抜かすのはよくない。

「うん、さりげなく見といてもらえたら助かる〜！ よろしくお願いします」

そう告げて、リサは厨房へと戻っていった。

彼女の背中を見送りながら、デリアが「それにしても」と呟く。

「ヘクターくんが、あそこまで恋に夢中になる人だったとは意外ね」

「そうねえ、しかも相手がヴィルナさん……あれ？ ヴィルナさんには婚約者がいるって、前に聞

いたような……」

オリヴィアがデリアを見ると、デリアもハツとして見返す。

「……ヘクターくん、もしかしてそのことを知らないんじゃない？」

デリアの言葉に、オリヴィアは真顔で頷いた。

第四章 関心を引く方法を考えます。

「今日は来なかったなあ、ヴィルナさん……」

ヘクターは自室のベッドに背中から倒れ込み、天井を見上げて呟いた。

仕事が終わって帰ってくると、疲れから眠気が一気に襲ってくる。だが、今日は目も頭も妙に冴えていた。

脳裏には、カウンター席に座って優雅にお茶を飲んでいた、昨日のヴィルナの姿が浮かぶ。

編み込んで左肩に流した濃い紫の髪。清楚で涼しげな白いワンピースは、袖や裾に薄い青の糸で刺繍が施されていた。

お茶のグラスを置くヴィルナの表情はどこか物憂げで、唇から吐き出されたため息に、ヘクターの胸が高鳴った。

いつもは騎士団の制服をかつちりと着込んでいるヴィルナが初めて見せた、女性らしい格好。

ヘクターにとってジークの元同僚というだけだった存在が、一瞬で気になる相手へと変化した。

「うわぁ！ どうしよう！ どうすればいいんだー!!」

ヘクターは枕を抱え、大きな体でベッドの上を転がる。勢い余って壁を蹴ってしまったが、そんなこと今は気にならない。

どうしようと言いつつも、ヘクターの顔はだらしなく緩んでいた。

恋の始めの一番楽しい時間に浸りきっている。

昨日のヴィルナの姿を思い出し、ただただ胸を高鳴らせる。それだけで、ヘクターは嬉しくて幸せだった。

「またすぐ会いたいよな。どこ行けば会えるんだろう……てか、なんでもっと早く気付かなかったんだ、俺!! リサさんとジークさんの結婚式の時なら話すチャンスもあったのに!!」

そんなことを言っても時間は巻き戻せないのだが、ただヴィルナが来店するのを待つしかない現状を考えると、過去にあったはずのきっかけをスルーしていたことがもったいなく感じる。

再びベッドの上を転がると、また壁に蹴りが入ってしまった。

その壁の向こうから、ドンドンと叩く音と、かすかに怒鳴り声のようなものも聞こえてくる。

単身者用の安アパートは壁が薄いし、声も響く。遅い時間ということもあり、ヘクターの行動は近所迷惑になっていたようだ。

ヘクターは、水を差されたような気持ちになりながらも、心の中で「すみません」と謝る。そして枕を首の後ろに戻し、手足をベッドに投げ出した。

「はあ……また会えたとしても、ヴィルナさんにとつて俺は、カフェの店員つてだけの存在なんだよなあ」

現実には立ち戻り、ヘクターは嘆く。見上げた天井には奇妙なシミが広がっていた。

何かの形に見えなくてもそれを眺めて、ぼーっとしていたヘクターは、不意にリサの言葉を思い出す。

「……そうだ。甘いものが好きなんだよな、ヴィルナさん」

そう言つて、むくりと上半身を起こす。

「うん、そうだよ。ただ待つてるより全然いいかもしれない！」

うんうんと何度も頷き、ヘクターは目を輝かせた。

気合を入れるように両手で頬をパシンと叩くと、「おおおー!!」と叫びながら、こぶしを天井に向かって突き上げる。

壁の向こうからドンドンドンと先ほどより大きな音がして、くぐもった怒鳴り声が響いてきたが、今のヘクターの耳には届いていなかった。

翌日、ヘクターは普段よりだいぶ早い時間に出勤した。

早起きした——というより一睡もせず、逸る気持ちのままカフェ・おむすびにやってきましたのだ。

だが、ドアの鍵は開いていない。ヘクターはドアの前で待ちながら、今日やろうとしていることを一つ一つ確認する。

「えっと、まずリサさんとジークさんに事情を話して、具体的にどうすればいいか聞いて……」

小さく呟きながら指折り確認していると、二つの人影を視界の端に捉えた。

「あ、来た!!」

ヘクターは目を輝かせ、並んで歩いてくるリサとジークに向かって手を振る。

するとリサの方が手を振り返しながら、小走りで行ってきた。

「ヘクターくん、おはよう！ 待たせちゃった？」

店の前で待っていたヘクターの姿を見て、リサは少し焦ったようにドアに鍵を差し込む。

「おはようございます!! いえ、俺が早く来ちゃったただけなんで！」

リサとジークが来たのは、いつも通りの時間。単にヘクターが早すぎたのだ。

何しろヘクターは寝ていない。これでも出勤するのをぎりぎりまで我慢したのだが、結局早く到着してしまった。

リサの後ろを歩いてきたジークが、ヘクターに声をかける。

「早いな、ヘクター。おはよう」

「おはようございます、ジークさん!!」

元気がよすぎる声でヘクターが挨拶を返すと、ジークは驚いたように目を見開いた。

それでも表情に大きく変化があったわけではないので、ヘクターはジークの驚きに気付かず、その声のトーンのまま話を続ける。

「あのっ、俺、お二人に相談したいことがあります!!」

意を決してそう切り出すと、リサは目を瞬かせ、ジークは怪訝そうに眉間に皺を寄せた。

「わかった。とりあえず中に入ろうか」

リサがドアを開けて中を指さす。気持ちが先走ってしまったことに、ヘクターは今更ながらハツとした。

ドアを押さえてリサを先に入らせたジークのあとに続き、ヘクターも店内に入る。

まずは着替えてからだというジークの言葉に従い、着替えを終えると、三人は改めて厨房に集まった。

「で、ヘクターさんの相談って、どんなことなの？」

リサが気を遣って話を振ってくれる。ちらりとジークの方を窺うと、彼はヘクターが話し出すのをじっと待っていた。

「えっと、俺、そろそろ自分でも新しい料理を考えてみたいなあと思ってまして……」

「わあ! いいじゃん!」

リサが期待に目を輝かせる。

「や、まだまだ未熟な俺なんか烏澁がましいんですが……」

ヘクターは謙遜し、胸の前で両手を振った。

正直、リサの期待に副えるほどのすごい考えはない。昨夜思いついたばかりで、具体的なアイデアがあるわけでもなかった。

何より動機が下心に溢れていて、胸を張れるようなことではない。

「理由はどうあれ、新しい料理を考えようという意欲はいいと思うぞ」

ジークは少し含みのある言い方をした。

暗に下心を指摘された気がして、ヘクターはぎくりとする。

「うっ……はい、ありがとうございます……」

居たたまれなさを感じつつも、ジークに褒めてもらったことで、ホッと胸を撫で下ろした。

「それで、どんな料理が作りたいの? 何か思いついたものはある? あ、材料は好きに使っていいからね!」

リサがワクワクした表情で、矢継ぎ早に質問する。

今すぐ作ってみると言わんばかりの勢いに驚き、ヘクターは両手を前に出して首を横に振った。

「ちょっと待ってください! 具体的に何をやるかまでは……」

「え、そうなの?」

リサは、きょとんとして首を傾げた。

ため息を吐いたジークが肩を竦めて口を開く。

「リサ、誰もが簡単に新しい料理を考えられるわけじゃない」

ジークの言葉に、ヘクターは無言でこくこくと頷いた。

「そういうものなのか……アランくんははじめから自分でいろいろ考えてたし、てつきり……」

二号店の店長をしているアランを引き合いに出すリサに、ジークは諭すように言う。

「アランは特殊だと思うぞ。普通は新しい料理を考えたくても、そう簡単には思いつかないし、何から手を付けていいのかわからないものだ」

「そうなんです。俺も漠然と思っただけで、実際に何から取り掛かればいいのかわからなくて……」

ヘクターは困った顔で肩を落とした。

リサは同情するように眉を下げ、ジークの方をちらりと見る。ジークはほらな、と言わんばかりの表情を浮かべていた。

「うーん。それじゃあ、何をどう助言すればいいのか……」

リサは顔を顰めて、うーんと唸る。

ヘクターはなんだか悪いことをしたような気持ちになっていた。ここまで悩まれるとは思っていなかったのだ。

「リサ、ヘクターには俺が教えるから」

そのジークの言葉に、リサは顔を上げた。

「え、でも……」

リサが何か言いたげに言葉尻を濁す。

ジークは小さく首を横に振って、ヘクターに視線を向けた。

「ヘクターもそれでいいか？」

「あ、はい！ もちろんです！ よろしくお願ひします！」

こうしてヘクターの新作料理は、ジークが指導することになった。

第五章 黙っていることにしました。

ヘクターの相談を聞き終えたジークたちは、ひとまずカフェの開店準備に入った。ランチメニューの仕込みをしながら、ケーキのスポンジやタルト台をせっせと作っていく。

その途中、リサが静かにジークのもとへとやってきた。

「ねえ、さっきのヘクターくんの相談、受けちゃって本当によかったのかな……だって、あれって完全にヴィルナさんに食べてもらうのが目的でしょ？」

リサは小さい声でこそこそと話す。

「ああ、そうだな」

「そうだな、って……手遅れになる前に、ヘクターくんに言ってあげた方がいいんじゃないかな？ ヴィルナさんの婚約者のこと……」

「いや、それはやめておこう」

「……どうして？」

「せっかくやる気を出しているんだから、それを削いでしまうのはもったいない気がする」

「確かにそうだけど……」

ヘクターが新しい料理を作りたいと言い出したのが下心から来ていることは、リサだけでなくジークもわかっている。ヴィルナに振り向いてもらうために何かできないかと考えた結果なのだろう。

まあ、ジークも同じ男として、ヘクターの気持ちもわからなくはない。ジーク自身、ここまで明け透けではないにしろ、リサに対して似たようなことをした過去がある。

それがいいか悪いかはともかくとして、新しい料理を考えるというのが成長に繋がることは確かだ。逆に言えば、その段階を踏まないと、さらなる成長は望めない。

ヘクターの技量を考えるとやや時期尚早な気もするが、理由はどうあれ彼が自分からそこに思い至ったのは、とてもいいことだとジークは思った。

だから、下手にヴィルナの婚約者のことを伝えて、その意欲を失わせてしまうのが、すごくもつ

たいない気がしていた。

ヘクターに対して、酷な対応かもしれないということはわかっている。それでも、料理人として成長できるチャンスを見すみす逃してほしくなかった。

ジークは作業の手を止め、リサに正対する。

「悪いが、ヘクターの件は俺に任せてほしい。ヴィルナの婚約者のことも、今のところは黙っていてもらえないか」

小声ではあるものの、きっぱりとした口調でジークは言った。

リサはジークの目をじっと見つめていたが、ややあつて小さく頷く。

「……うん、わかった。ジークに任せる」

「ありがとう」

「ううん。ヘクターくんのこと、よろしくね」

「ああ」

ヴィルナのことをあえて黙っていることには当然、罪悪感がある。それをリサや他のメンバーにも強いることになるのだから、ジークとしてもかなり複雑だ。

けれど、ヘクターのやる気と将来性に懸けたいと、ジークは強く思っていた。

ヘクターと新作料理について話す時間ができたのは、お昼をだいぶ過ぎた頃だった。

「具体的ではなくとも、漠然としたイメージみたいなものはあるのか？」

ジークが問いかけると、ヘクターは勢い込んで答える。

「えっと、作りたいのは甘いお菓子で、できたら見た目が華やかなのがいいと思ってます！」

ヘクターの言葉を聞き、ジークは一つ頷いた。

「見た目が華やかなお菓子か。じゃあ、そこから掘り下げていくぞ」

「はい！」

「使いたい食材はあるか？」

「使いたい食材、ですか。うーん……」

「……見た目を華やかにするならば、色が濃い果物なんかがいいんじゃないか」

ジークの助言に、ヘクターがぱあつと顔を輝かせた。

「おお！ そうですね！ 季節の果物だと特別感もあつていいかもしれません！」

「よし、じゃあ実際に果物を見ながら考えてみるか」

会話だけでも考えることはできるが、実際に食材を見て触って考えた方が、格段にアイデアが浮かぶ。

そこでジークとヘクターは、今の時季に手に入る果物を片っ端から集めてみた。

「……結構ありますね」

ヘクターが調理台の上に並んでいる果物を見て呟く。

確かに並べてみたら意外とあるな、とジークも思った。夏は果物が豊富に採れるため、当然と言えば当然なのだが……

「今の時季、旬の果物はネフルーとチェッドだな」

ネフルーは、こぶし大の丸い果物である。淡いクリーム色の皮の一部が、ピンクに染まっている種類が一般的だ。中には、濃い紫の皮をした小ぶりの種類もあるが、こちらは酸味が強い。

一方、チェッドは小さい粒が房になっている果物だ。こちらも種類がいくつかあるが、皮が赤いものと緑のものに大きく分かれる。このチェッドは、ワインの原料になる果物でもあつた。

ジークがネフルーとチェッドを薦めると、ヘクターは困惑したように眉尻を下げた。

「もつと珍しい果物を使うというのは、無理ですかね……」

ジークの反応を窺うように、ちらりと視線を寄越してくる。

「無理ではない。けれど、初めて料理を考える場合には、あまりお勧めできないな」

「なぜですか？」

「理由は主に二つ。まずは珍しい果物ほど、流通が安定していないということ。今日は手に入っても明日には手に入らないかもしれないから、試作できる回数も限定される。もう一つは、珍しいというのはずなわち、扱いは慣れていない食材であるということ。例えばこのシイレ、どんな味がすぐに想像できるか？」

シイレとは、全長三、四センチほどの楕円形の果物だ。くすんだ朱色の表皮にはごつごつとした

凹凸があり、中にはつるりとした白い果肉が詰まっている。

酸味はあまりなく、さっぱりとした甘みと独特の香りがする果物であった。

「うう……いいえ……」

ヘクターはばつが悪そうに視線を泳がせながら答える。

「味が想像できない果物を使うのは危険が大きいと思う。まして初めて料理を考えるのに、それは高望みすぎだ」

「……そうですね」

しょんぼりとした空気を背負いつつ、ヘクターはジークの言葉に同意した。

気持ちはわからなくもない。珍しい食材を使えば、それだけで人目を引くことができる。ヘクターの目的を考えると、それが一番手っ取り早いようにも思えた。

けれど今説明した通り、そう簡単ではないし、それをやってしまうとヘクターの成長に繋がらない気がするのだ。

「挑戦する意欲は買うが、物事には段階がある。まずはそうだな……ここにコロツケがあるとしよう」

「……は？ コロツケ、ですか？」

突然、お菓子ではない料理名を出されて、ヘクターは目を瞬かせる。

彼の反応を気にすることなくジークは続けた。

「そう、コロツケだ。ヘクターなら何をかけて食べる？」

「コロツケだと……ウスターソースですかね？」

よくわからない様子ながらも、ヘクターは答えた。

「そうだな。じゃあ、ウスターソース以外の何かをかけると言われたらどうする？」

「うーん……ケチャップ、醤油、マヨネーズとか？ そのあたりなら合うような気がします」

その言葉を聞いて、ジークは頷く。

「うん。普通はそう考えるよな。それが新しい料理を考えるための第一歩だ」

「え……」

「すでに存在する料理の一部を変える。まずはそこからやってみることだ。さっき、かけるソースを変えてみると言われた時、コロツケとソースの味を想像しただろう？」

「そういえばそうですね。なんとなくですが……」

「なんとなくでも想像できれば見込みはある。今度はコロツケじゃなく、すでに存在するお菓子を思い浮かべて、その材料を別の果物に置き換えることを想像するんだ」

「お菓子の材料を置き換える……」

ジークの言葉をヒントに、ヘクターは想像を膨らませる。口元にこぶしを当て、じっと考え込み始めた。

ややあつてヘクターが顔を上げる。

「少しだけわかった気がします。今日一日考えさせてもらってもいいですか？」

「ああ、わかった。他に聞きたいことがあれば、その都度聞いてくれ」

「はい！」

ヘクターの返事を聞くと、ジークは彼からそつと離れた。

あくまで新作料理を考えるのはヘクターであり、ジークにできるのは手助けだけだ。どういう手順で考えていくのか教え導くことはできるが、主となって考えなければいけないのはヘクター本人なのである。

はじめから突き放すような厳しい指導に見えるかもしれないが、ここで何から何まで教えるのはヘクターのためにならないだろう。

それに料理を創作するには、個人のセンスが大いに関わってくる。料理のスキルが上がリ、数をこなしていけばそれなりにできるようになるものだが、ヘクターはまだそこに至っていない。

中にはアランのように、教えられるより先にできるようになる者もいる。けれど、それは例外中の例外。そんな人間はそうそういないだろう。

さて、ヘクターはどうだろうか。

ぶつぶつ呟きながら考え込む姿を眺めて、ジークはそう思った。

第六章 意中の人が来店しました。

「おー、やってるやってる」

厨房の片隅で話しているジークたちを見て、リサはそう呟いた。

そこに、ちょうどお皿を下げてきたデリアが通りかかる。

「ん？ どうしたんですか？ あの二人……」

「ああ、あれはね、新しいレシピを考えようとしているヘクターさんに、ジークが指導中なの」
リサが小さく笑いながら言うと、デリアは「へえー」と感心したように頷いた。

「つてもしや、それって……」

デリアがハツとして目を見開く。

「ヘクターくん、『あなたのために新しい料理を考えました』戦略かしら？」

声を潜めて言う彼女に、リサは肩を竦めた。

「そうみたい。直接聞いたわけじゃないけど、バレバレだよね」

「やっぱり好きな人に何かを贈りたいと思うのは、男の性とか甲斐性とか……」

「なんにしても今は見守ることしかできないから……もちろん助言はするけどね。ただ、痛い目を

見て料理が嫌にならなければいいな」と

「ヴィルナさんの婚約者のこと？」

「デリアもそれを心配していたのか、少し困った表情を浮かべる。

「そう。確実に知らないと思うのよ、ヘクターくん。知ってたら普通は諦めるはずでしょう？」

「やっぱり知らないのね。ヘクターくんのためには言っておいた方がいいんじゃない？」

「うん、そうなんだけど……それはちょっと待ってもらえる？」

リサはデリアに、その件でジークと話し合ったことを告げた。

「すごく勝手かもしれないけれど、ヴィルナさんの婚約者のことは言わないでおこうってジークと決めたの。今のヘクターくんのやる気を削ぐのはもったいないから……」

ヘクターに可哀想なことをしている自覚はある。望みがないのを知っているながら、協力しているようなものだ。

けれど、ヴィルナとの恋が実らなくても、ヘクターの成長には繋がる。リサとジークはそう信じていた。

「じゃあ、私も何も言わないでおきます」

「ありがとう、デリア」

「まあ、失恋の経験も人生の糧になりますよね。年長者が余計なおせっかいはして、変に拗れたら大変だし」

表情を曇らせているリサを励ますように、いたずらっぽく告げるデリア。
彼女の気遣いを感じたりサは柔らかに微笑むと、そこで会話を切り上げて仕事に戻った。

夏の強い西日が窓から差し込む時間帯、カフェに一人の客がやってきた。

「こんにちは。席空いていますか？」

「まあ、ヴィルナさん!」

思わず驚いてしまったデリアに、ヴィルナはきよんとした顔をする。

「あの、何かありました……?」

「い、いえ、なんでもないので! 暑かったですでしょう? こちらへどうぞ」

デリアはすぐに笑顔を作り、ヴィルナを空いている席に案内した。

ヘクターの件があるせいで、変に意識してしまう。だが、ヴィルナは現時点で何も知らないのだ。椅子に座ったヴィルナにメニューを差し出しながら、デリアはおかしな空気を払拭しようと笑顔で話しかける。

「制服ってことは、お仕事帰りですか?」

「そうです。今日は早上がりなんですけど、さっきまで外を巡回してたので暑くって! 帰る途中に涼んでいこうと思ってカフェに寄りました」

暑いと言いつつ、汗はかいていなかった。制服にも、いつも通り結い上げた髪にも乱れはない。